

大寒に父の命日を迎えます。この頃、外に出ると、底冷えのする冷気が骨を軋ませるほどに突き刺さって来るのを感じます。この寒さは体力が落ちた老人には耐え難いものです。やがてそれが悪寒となってしまうと、一大事。この時期はインフルエンザが流行し出す頃です。流行するよりも先に、予防注射の甲斐もなく、今年も罹ってしまいました。残念！無念！

私が小学校 5 年生の冬の事です。大寒の寒さが引き金になったのでしょうか、原因不明の高熱に襲われました。40 度、41 度という高熱、頭痛、嘔吐が続きました。何か食べてもすぐに吐いてしまい、水やジュースしか口に入りません。頭の痛さを訴え、一向に下がらない熱に両親は参ったことでしょう。あの頃は抗生物質などなかったでしょう。氷枕、氷嚢を替えて、夜中も枕もとで看病してくれました。インフルエンザではなかったようです。その状態が 40 日以上も続いたのです。医者は髄膜炎を疑い、脊椎穿刺をして検査しましたが、透明でした。高熱が引いたのは 3 月に入ってからのことでした。

高熱が引いて、やっと生きた心地がしたのを覚えています。けれども食欲はなく、微熱が取れませんでした。やっと起き上がれるようになり、庭を眺めると犬小屋にマリがいませんでした。病気の時はマリのことなど思い出すこともありませんでしたが、少し心配になって、「マリは？」と聞くと、母は驚くべきことを話してくれました。



「マリは 3 月のある朝、心臓麻痺で死んでいた。その日に、悦子の熱が下がった。マリが悦子の代わりに死んだとしか思えない。悦子が元気になったら教えるつもりだった」と。

医者に往診を頼み、薬を飲ませ、長い間、看病し、私の病気が治るようにと真剣に祈っていた母にとっては、私の回復とマリの死が偶然同じ日だったために、そのように結び付けて受け止めざるを得なかったのでしょうか。

マリは雑種とはいえ、まだ 5,6 歳の元気なシェパードで、死ぬような兆候は何もなかったのです。母は動物を怖がっていましたが、マリが父になついていたので、「犬畜生でも情がある」と信じていたのです。母は「情念」といったものに心惹かれる人でした。私の大学入試合格を願って、密かにひと月「お茶断ち」をしていたほどです。マリの死は悲しい衝撃でしたが、母の言葉を受け止め、マリが身代わりになったと信じました。私の病気と回復が劇的状況でしたから、マリの死も劇的だと思いました。マリへの愛と感謝の思いがますます強くなりました。

マリは、実は父の愛犬でした。マリは小型で、顔も綺麗な茶色でしたから、全く凄みはなく、おとなしい忠犬でした。どこにでも一緒に付いて出掛けたマリがいなくなって、父が一番淋しかったでしょう。父はマリの毛皮を形見として、残してもらいました。それを父は書斎の椅子に掛けておき、時々その房々とした茶と黒の毛を撫でました。私たちも父の書斎に入っては、「マリだね」と言っただけでその毛皮に触ったものでした。

大寒は、私にとっては、父の生と死、マリの生と死の記憶がいつも一緒に思い返される時期なのです。大寒は、凜とした厳しさの中に、命の春を待つ忍耐を秘めているようです。